

山口国体関係写真〔開会式会場〕（久幸虎雄文書370）

人 ⑧

## 「大群衆」～昭和38年山口国体～

### 《山口国体開会式》

昭和38年(1963) 10月、第18回国民体育大会（山口国体）が開催されました。その開会式には、選手・役員1万6千余人、マスゲーム出演者や式典補助員1万5千人、それを見守る観客が4万2千余人。まさしく「大群衆」でした。

上の写真は開会式の航空写真です。スタンドを埋め尽くした観衆や各県選手団を運んだ約280台のバスが整然と幾何学模様のように並ぶ様は、圧巻です。

山口県にとって、これだけ多くの選手・観客を全国から迎えるスポーツイベントは初めてのことでした。非日常的な規模の人々が集まる行事をスムーズに運営するために、どのような準備がなされたのでしょうか。大会を支えた舞台裏を見てみましょう。

### 《交通・輸送上の課題》

この大会の成功の鍵は、選手・関係者の輸送をいかにして円滑に行うかなど、交

通対策の良否にかかっていると認識されていきました。逆に言えば、交通面が一番の不安材料であったわけですから。この課題に対しては、国体事務局の交通部と輸送部が主に対応しました。

大会が開かれた頃の日本は自動車保有台数の急増期にあたり、山口県でも昭和37年末において14万台、毎年20%の増加がありました。それに伴い主要幹線の交通量も、年間10%～20%増加していました。

また、競技場の北側を通る現在の国道9号線はまだなく、人々の輸送は競技場の南側を通る当時の国道9号線（現県道204号宮野大歳線）と国鉄（現JR）山口線に頼らざるを得ない状況でした。

大会開催にあたり、まず、開会式に集まる人の数と車の台数の予想、そして限界交通量の査定が行われました。これによると、開会式には7万人余が集まり、車の数は7,300台余。入場締め切り時の午前



第18回国民体育大会報告書〈行政資料 60各団-154〉

昭和38年山口国体の実施報告書です。不安視された交通問題を無事クリアして大会は終わりました。大人数が集まるこのイベントを成功させるために、どのような準備がされ、運営がなされたのか、その様子を、この報告書から振り返ることができます。

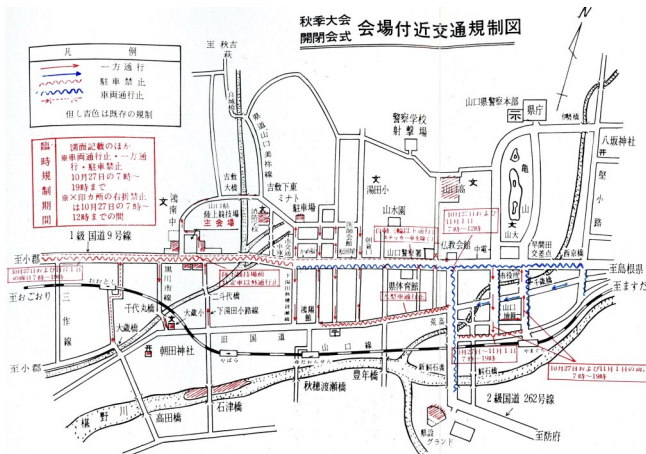
11時までに延べ1万台以上の車が通行すると見込まれました。

これに対し、当時の国道9号線は最も狭いところで幅が8mで、常時674台の交通量がありました。この道路の限界交通量は片側1車線につき607台とされていましたので、開会式当日にこれだけ多くの数の車を通すことは許容範囲を遙かに超え、混乱が生じることは明らかでした。交通事故が続発することも心配されました。

この交通問題をクリアするためには、①開会式当日の大規模な交通規制、②大量の参集車を収容するための駐車場の拡張整備、③選手・大会関係者を円滑に輸送するための綿密な輸送計画などが必要でした。

### 《交通規制》

下の資料は開閉会式の交通規制図です（「交通のしおり 山口国体秋季大会」〈リーフレット昭和38-13〉）。



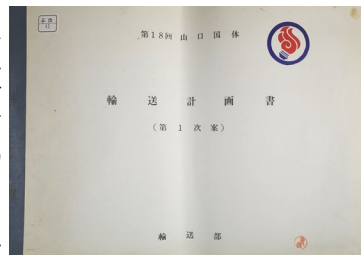
これによると、大会関係車以外の車は、競技場を中心に広い範囲で国道への進入が禁止され、車の通行を妨げることのないように競技場周辺が6.5kmにわたり駐車禁止とされています。さらに、一方通行区間や国道に進入する車両の右折禁止箇所を設けるなどして、車の流れがスムーズになるよう計画されました。

2度にわたる模擬国体で交通規制の訓練を行ったことや、規制についての事前広報が徹底されたことなどにより、当日の交通規制は極めて円滑に運営されました。

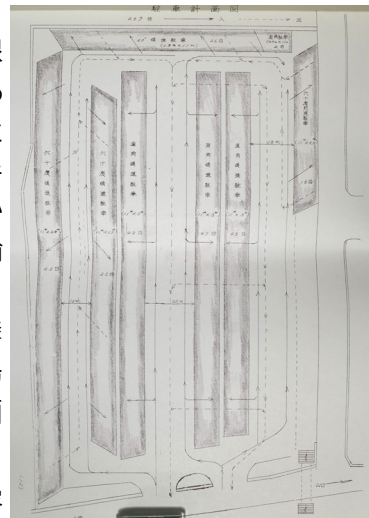
### 《選手輸送》

次の資料は国体事務局輸送部が作成した「第18回山口国体輸送計画書（第1次案）」（平田家文書41）です。これには選手・関係者および観客の輸送方法が細かく記されています。

山口国体は、県下各地の会場に分散して競技が行われました。各会場の宿舎から開会式への選手輸送については、当初、鉄道輸送が検討されました。



しかし、単線の山口線では輸送等量に限界があり、一般観覧者の来場と時間が重なるため、選手掌握・体調管理の観点から、宿舎から直接、バス輸送されることとなりました。右の資料は競技場に隣接して設けられた駐車場におけるバスの配置計画図です。

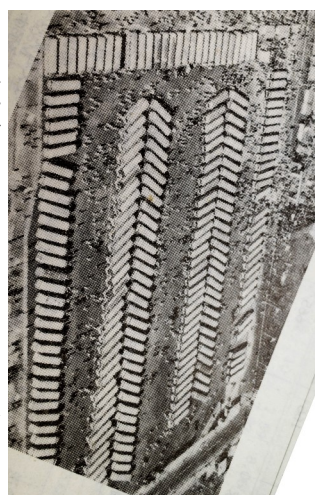


全259台のバスを収容するため、駐車場への進入経路、駐車場内での進み方、そして駐車方法が示されています。開会式までの限られた時間内に、確実にこのような配列で駐車を完了させる必要がありました。

駐車スペースをできるだけ有効利用するために、進行方法を定め、「直角後進駐車」、「60度後進駐車」、「60度前進駐車」を適宜組み合わせるなど工夫が施されています。この計画にしたがい、幾何学的な模様のバスの配置はできあがり（右下）。

ただ、第1次計画案であるためか、実際の写真と見比べると、この計画よりも60度傾斜の駐車が多く、また、進行方向が変わったのでしょうか、60度傾斜の向きが逆になっているなどの相違点があります。

このような周到な準備を経て、また県バス協会の全面的な協力もあり、選手団のバス輸送は滞りなく実施されました。そのような努力の結果、国体史上最高の数の人々が開会式に無事、「集まる」ことができたのです。



第18回国民体育大会報告書  
〈行政資料60各団-154〉